

---

# 女の子になった少年剣士

彰子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女の子になつた少年剣士

### 【Nコード】

N2918Y

### 【作者名】

彰子

### 【あらすじ】

幼き日から、強くなることだけを心の糧として生きてき少年剣士アルスは、敗北に傷心し、死に場所を探していた。彼が毒薬を飲み目が覚めると女の子になっていた！？殺伐とした世界しか知らなかった少年が家族愛そして知り合った少年との恋愛を通して、自分の生きる道を見つけていく！

## 第1話 挑戦と挫折

とある宇宙のとある惑星にある小さな大陸。

ここでは、サン族とムーン族という2つの民族が覇権を巡って戦争していた。

戦争は先進的な火器をもつサン族の圧倒的優位に進み、ムーン族は土地を失い、ついには森の奥ある小さな王国をわずか一つ残すのみとなった。

物質的にも精神的にも追い詰められたムーン族。

彼らの心によりどころになっただけなのは、古代の預言者が遺したある古文書の一節だった。

『ムーンの救世主、我が死より1000年目に一人生誕す。彼の武勇によって一族は悪しき蛮族を打ち破り、やがて平和な世界が訪れるであろう』

その1000年に近づいていたのだ。出どころのうさんくさい書物ではあったが、信じる者は多かった。王族の中にすら信奉者がいるくらいである。

書によると、救世主を産むことができるのは、特定の条件を満たした男子の剣聖と女子の舞姫だけであるという。

剣聖の条件は、王国で開かれる天覧剣術大会で優勝すること。舞姫の条件は舞踏会で剣術大会の優勝者に指名されることである。

この記述に基づき、ムーンの王は天覧の剣術大会と舞踏会を共に開催することに決めたのだ。

この決定に対し、國務大臣は王に訝しげな顔をして尋ねた。

「あのような迷信を信じるなどは、賢明な王らしからぬ判断ですな」

「わしとて、あのようなものを端から信じておらんよ。しかし、あれが民の心のよりどころになっているのは事実だ。これがきっかけで男は武術に励み、女も文化的な活動に興味をもってくれたらそれで十分。今は、民の士気を下げないことが肝要なのだ」

「もし、思惑どおりに救世主となるべき子どもが生まれ健やかに育たなければ？」

「そのときはそのときで次の手を考えよう」

剣術大会には優勝候補とされている者が2人居た。

1人は街の郊外の小さな道場でめきめきと頭角を現している豪傑リーズ。

男らしいごつい顔つきをした背の高い青年だ。女性には密かに人気があったが、本人がシャイなせいか、ご縁はなかなかない。

もう1人は貴族にも一目置かれている名門剣術道場の師範代の息子であるアルス。

師範代である父親はなかなかの豪傑であるが、本人は母親似の中性的な顔立ちの美少年である。

あくまで親の七光りでの評価であり本人の実力はさほどではないとも言われている。

リーズとアルス、出自は名門道場と零細の道場とそれぞれ全く違い、普通に暮らしている分には互いに接点がないはずであるはずだが、本人たちは旧知の仲であった。

幼少期、親から剣術の稽古を仕込まれるよりも昔に、偶然、河原で出会ったことがきっかけで、毎日のようにチャンバラごっこをやったのだった。

結果は10回勝負して、10回ともリーズの勝利。遊びのチャンバラでワンサイドゲームではつまらないので、リーズはハンデを与えたのだがそれでも10回中8回はリーズが勝ったのだった。

そして、アルスは悔しさのあまり泣きじゃくり、リーズがそれをなだめるのがいつものやりとりだった。

そうだった因縁があるので、この大会に向け、アルスにとっては、

幼き頃の借りを返す機会であると闘志を燃やし、リーズは懐かしい仲間との遊びの続きをするようなノスタルジーに浸っていたのだった。

剣術大会当日、リーズとアルスはそれぞれ順調にトーナメントを勝ち抜き、下馬評どおりに決勝戦はこの両者のカードとなった。

「泣き虫だったお前がよくここまで強くなったもんだな」

「僕にとっては君に勝つことだけが目標だった。今日は絶対に負けない！」

口上が終わると、互いに構え、剣と剣がぶつかり合った。勝負がついたのは一瞬だった。アルスの剣の刃先は折れ、宙に舞った。

リーズは剣の先をアルスの顔先に突きつけた。

「勝負有り！勝者リーズ！」

## 第2話 女の子になっちゃった!?

「リーズにはやっぱり勝てないや……」

試合後、アルスは傷心のままお城から遠く寂れた村にいた。質素な鍛冶屋がたたずんでいる以外には建物は無い。

しばらく、彼はしばらく熟考していたが、ついに思いつめたように手投げカバンの中から、薬のビンを取り出した。

アルスには試合前に、親から言いつけられていたことがあった。剣術大会で優勝できぬものが帰る家はない。

敗れたものは死をもって償え、と。もし、死ななかったら、刺客を差し向けられ、不名誉な形で殺すと。

薬のビンは知り合いの錬金術師からもらったものだった。

実験中のものではあるが、これを飲むと苦しまずに死ねると聞かされていた。家の錠には絶対に逆らえない。アルスはビンから、錠剤を5粒ほど取り出し、そのまま飲み込んだ。

（熱い……。体が燃えるように熱い。全身が、頭の方からつま先に至るまでが焼け付くようだ。苦しまずに死ねると聞いたのは嘘だったのか）

自害の手段を誤ったのかとアルスは後悔をしながら始めていた。しかし、

しばらくして、意識が朦朧としはじめた。

それは睡魔に似ていた。ああ、これでやっと楽になれるのかと彼はまどろみに身を任せた。

……

アルスは目を覚ますとベッドの上に寝かされていた。

傍らには心配そうに中年の女性が顔をのぞきこんでいた。部屋の調度は暖色のものが多く、ぬいぐるみもいくつか飾られている。

香水のにおいが漂う。おそらく、女性の部屋なのだろう。

「ここは、街外れにある小さな鍛冶屋よ。大丈夫かい？」

（鍛冶屋……）

アルスは鍛冶屋の前で薬物自害を試みたことを思い出した。それがこうして、ここにいるということ、倒れているところをこの家人が助けてくれたのだろう。

アルスは自分が情けなくなった。戦いに敗れ、そのけじめもつけることすらできずなんと情けない人生だろうと。

「顔色があまりよくないようだからしばらくここで寝ときなさい。



お嬢ちゃん」

お嬢ちゃん。懐かしい響きだった。

アルスは中性的な顔立ちをしているせいか、幼少期は女の子と間違えられることがしばしばあった。

第二次性徴が過ぎて、男らしい体つきになるとさすがにそのようなことはなくなつたが、そのような呼び方をされると懐かしさを感じるのだった。

昔は女の子と間違えられるとムキになつて男だと反論したものだったが、今のアルスにはそのような気力は残っていなかった。

身体を起こし、窓の外を見やると、牡丹雪が降り、もみの木に積もっていた。美しい光景だった。

アルスは自分の身の振り方ばかりを考えて、周囲を見る余裕がなかったせいで、こんな小さな感動すらも見逃していたのだった。

美しい景色から目を外し、うつむくと「おや？」とアルスは思った。身につけていたのはレースのついたピンク色のパジャマ、どう見ても女性用のものである。

男としての自我をもつアルスは急に恥ずかしくなった。

「おばさん。介抱してもらっている身で、こんなことを言うのも、なんです。べ、別の服はありませんか？ちよつとこの服は恥ずか

しいですっ!」

「すまないね、あたしが持っている寝巻きはこれともう一着しかないんだよ。そのもう一着は洗濯してまっけているし。あとあとは息子と夫の男物の寝巻きしかないよ」

「だから僕は男……!」

身振り手振りをしながら、必死でアルスが説明しようとしたそのとき、肘のあたりにやわらかい異物が当たった。

それは男の身体についているはずのない膨らんだ胸だった。股の間を確かめてみるとついていべきものがなかった。アルスは思考が停止して動きが固まった。

「大丈夫かい?」

「鏡があれば見せてもらえますか?」

「はいよ」

おばさんは手近にあった小タンスの引き出しから、手鏡を取り出し、手渡した。

そして、アルスがおそるおそるのぞくとそこには見知らぬ少女の姿が映っていたのだった。睫毛が長く、丸っこい顔、肩まで伸びたロングの髪の毛。ほんのりと赤らんだ頬。試しに、アルスがはにかんでみると鏡の向こうの少女もはにかんだ。

「これが僕……?」

「自分の顔に見覚えがないって……。あんだ、もしかして記憶喪失かい？」

### 第3話 少年レオと家庭の団欒

「あんだ、もしかして記憶喪失かい？」

記憶は失ってないとアルスは否定しようとしたが思いとどまった。

このまま、自分が記憶喪失ではないことを主張したらどうなるだろうか。

当然、素性や身の上を話さねばなるまい。

そうすると、道場の人間が呼ばれ、この家に押しかけてくるかもしれない。

そう予測すると、アルスにとっては正体を明かすことにメリットがないものだった。

むしろ、赤の他人のような姿になっているのだから、このまま別人になりすました方がいい。そう思ったのだ。

「はい、そうです。私、自分がどこから来た誰なのか、全く思い出せないのです」

「名前も思い出せないのかい？」

「はい」

アルスは嘘をついたことで良心がずきりと痛んだ。

これで、自分の正体がますます名乗りにくくなったのだった。

「母さん。お客さんが来ているよー」

「はいはい。どちらさんだろうねえ」

女性が部屋を出ていき、入れ替わりに男の子が入ってきた。

おそらく、年頃はアルスより1つか2つくらい年下だった。

そして、アルスはこの男の子に見覚えがあった。

(最近どこかで会ったような……)

しかし、それがどこなのか全く思いだせないのだった。

「よ、よう……」

「はじめまして」

ぶっきらぼうにあいさつしてくる男の子にアルスは優しく微笑みかけ、丁寧にお辞儀で返した。

これで少しは女の子っぽく装えるだろうという計算があった。

すると、男の子は挙動不審にうつろつきまわり口をもごもごさせた。

「お、俺の名前はレオナルドって言うんだ！レオって呼んでくれよなっ！」

それだけを言うと、ぎこちなくピースサインを作り、そのままそくさと部屋から出て行った。

不思議に思っていると、しばらくして、おばさんが戻ってきて言った。

「うちの息子、レオって言うんだけども、何か妙なこと言わなかったかい？」

「いいえ。少しだけ、緊張をしているみたいだけども、別におかしな様子はなかったですよ」

「そうかい。まあ、緊張するのも無理もないね。あの子、同世代の女の子を見るのははじめてだから」

「そうなんですか？」

「ああ、この集落の近くにはかつて、鉱山があったんだよ。昔はともよくとれるものだから、若い人足がたくさん働いて賑わったものさ。けども、二十年ほど前にめばしい鉱物は掘りつくしてしまっただようでね。産業がなくなって、若い人はどんどん離れていってここに残ったのは昔から住んでいる年寄りばかりさ。ここに住んでいる若い子は、もうレオ以外には、男女の兄妹が2人いるだけさ。若いといってもまだ5歳と3歳なんだけどね」

おばさんは自嘲気味に苦笑いをした。

「そんな環境で育ったものだから、あの子は女の子とどう会話していいのか分からないのさ。無礼な態度をとるかもしれないけど許してやっておくれよ」

「あはは……」

本当は女の子じゃないんだよという含みを持たせた愛想笑いをアルスはしながらも、とんでもないところに来てしまったと思ったのだった。

その日の夕食、食卓を囲っているのはアルスとおばさんとレオナルド、そしてレオナルドの父親であるご主人の4人。

出されたのは、トマトをふんだんに使ったミネストローネだった。

オニオン、ポテト、セロリ、ズッキーニをはじめ多彩な野菜が入っている。

産業がない貧しい村という割には栄養バランスを考えた贅沢なスープだった。

「わあ！おいしそう！いただいていいですか？」

アルスは、少々大きさに驚いてみせた。男のくせにかわいこぶりっこしている自分自身に内心苦笑いしながら。

「はいはい。どうぞ。たくさん、召し上がってくださいな」

「お、俺もいただきます!」

レオナルドは自分の家の食卓なのに緊張しているようだった。

「ところでお嬢ちゃん。名前はなんていうんだい？」

ご主人から話しかけられる。

「あ……えっと」

アルスという名前は男でも女でも通用する名前ではあったが、正直に名乗ることには彼には抵抗があった。

こんな僻地とはいえ、いつ、道場の刺客が来るか分からないからだ。

「名前は覚えていません。記憶を失ってしまして」

「そうか。じゃあ、当面はアリシアって名前を名乗ってみてはどうだ?うちに、もし、女の子が生まれたらつけようと思っていた名前だ」

「ありがとうございます」

アルス、いや、アリシアはにっこりとほほ笑んで返答した。



食事もおおかた食べ終わり、だんらんムードになっていたころ、激しく扉を叩く音が響いた。

「こんな夜更けに誰だろうね」

おばさんが席を離れて応対に出た。

しばらく、おばさんと訪問者が口論しているのを見て、まずは主人、次いでレオナルド、最後にアリシアが玄関に向かった。

「だから、うちにはそんな人は居ません」

おばさんと言いあっていた相手にアリシアは見覚えがあった。

全身に黒いローブをまとい、その隙間から垣間見える鋭い目つき。マリファナの常用で黒ずんでしまった歯。

彼の名はゴルト、アルスと同じ剣術道場の生徒で、本業は刺客をやっている男だ。

この男がこの村を訪れる理由としてアリシアに考えられることはただ一つだった。

彼（女）が死んだのを確かめに来たのだ。

アルスが試合後に死に場所を探していたとき、尾行の気配を感じたので、なるべく撒くように歩き、振り払ったつもりでいたのだ。

しかし、どこかで痕跡を残してしまったのだらう。

こんなところまでつきとめられてしまっていた。

アリシアはゴルトと目が合い思わず体が強張る。

(バレたか?)

「お嬢ちゃん、どこかで会いませんでしたかな？」

「い、いいえ！」

「そうか、気のせいか。その怯えたような目つき、どこかで見覚えがあるのだが」

そう冷たい目つきで言われた瞬間、アリシアは全身が震えた。

「とにかく、うちにはアルスという人は居ませんからお引き取り願えませんか？ 4人家族でつましやかに暮らしているだけなんです」

おばさんがそう言うと、ゴルトはうつむき「分かりました」と一言だけ残すと、あっさりと引き下がった。

(納得をしたふりをしているだけだ。やつはもう一度来るつもりに違いない)

アリシアはそう直感したのだった。

## 第4話 2年後の約束

夜更けすぎ、アリシアは荷物をまとめて、鍛冶屋の家を発った。

これ以上、この家に居たらみんなに迷惑をかけてしまう。

そう判断してのことだった。

(ごめんなさい。本当はお礼の一つは言わなきゃいけないんだと思う。だけど、そんなことしたら、やさしいこの家の人たちはみんなして僕のことを引きとめてくれるだろう。そうなると、きつとその言葉に甘えてしまって、結果的にみんなに迷惑をかけてしまう)

アルスは幼いころから、剣術の達人となるように親から厳しく躾けられてきた。

愛だの情だのといったものはなるべく排し、朝も晩も、ひたすら戦うことだけを考えながら生きてきたのだ。

だからこそ、夕方に味わった家族団欒はアルスにとっては衝撃だった。

修羅の道しか知らなかったアルスにとって、家庭とは殺伐としているものだという彼の常識だった。

そして、その常識がたった一晚の食卓で崩れ去っていったのだ。

（本当はあの家族にもっと甘えたかった。だけど、僕にはそれを享受する資格はない）

雪が降り積もる中、村の出入り口である門の前に大きな人影をアルスは見つけた。

その人影の正体はアルスが予見していた通りの人物だった。

「やあ、鍛冶屋の家のお嬢ちゃんじゃないか。どこに行くつもりかい？」

（ゴールド……）

アルスは心をかき乱されつつも平静を装った。

「街に買い物にいくつもりです。薬草を切らしてしまっ……」

「こんな夜更けにかい」

「ええ」

横を通り過ぎようとしたとき、ゴールドはおもむろにアルスの腰に手を回し、抱き寄せた。

必死に抵抗するが女の体では引きはがすのは無理だった。

「気が弱いくせに無理に強がるうとするあたりは、あまり変わっていないね、アルス坊ちゃん」

「アルスって誰ですか？私の名前はアリシアです！離してください！」

女の体ではこんな甲高い声を出せるのかと自分でもやや驚きながらも、アルスは村娘の演技を続けながら抵抗した。

「そうだよ。この目つきだ。この子犬のように怯えた目つき、これこそまさしくアルス坊ちゃんだ」

「私はそんな人じゃありません。離してくださいゴルドさん！」

そう言っつて、アルスは「しまった！」と思った。

「なんで、俺の名前がゴルドだつて知っているんだ。この村では本名を名乗らずに搜索してきたはずだが……」

痛いところを突かれ、アルスは沈黙してしまった。

「錬金術師の作った怪しい薬でも飲んで別人になりすましたとかそのあたりか。しかしまあ、坊ちゃんがこんな可愛い女の子になっていたなんて驚いたよ。おおかた、あと2年もすれば俺好みのいい女に育つんじゃないか。そうだ。いいことを考えた。道場には生きていたことは黙っておいてやるから、俺の女にならないか」

それはアルスにとって、ぞっとするような提案だった。

男に慰み者にされてしまう。しかも、こんな魂の汚れた男に。

「嫌だ！誰がお前の言うことなんか！」

「あの一家を皆殺しにすると書いてもか？」

「なっ！」

それはアルスにとって、自分の命を取られる以上にクリティカルな脅し文句だった。

「卑怯者め……」

「なんとも言えばいいさ。俺は欲しいものを手に入れるためには手段を選ばない」

そういうと、ゴールドは右手で数字の2を作った。

「2年後だ」

「2年後？」

「2年後の今日に、お前を迎えに来る。その間に逃げようとは思わないよ。もし、そうしたら、あの一家の命はないと思え。お前は逃げることでできない甘ったれ小僧だということは知っている。おっと、今はただの小娘だったな」

## 第5話 決意そして明日へ

ゴルドは去り、アルスは一人その場に残された。

（あの一家の命はない……か。きっと、ゴルドのことだから本当に僕がこの村から逃げたら殺すつもりなんだろうな。いや、ひよっとしたら、2年間逃げなくても口封じのために殺すのかもしれない。もともと、僕だけが死ねば全て解決したのに、あの善良な一家までもを命の駆け引きに巻き込んでしまったんだ。僕が死にそこなっただけに……）

アルスの胸中は罪悪感でいっぱいだった。

（今の僕にできる責任の取り方は一つしかない）

村はずれにある地割れ、そこからは深淵の闇がアルスをのぞいていた。

正確な深さは分からないが、ここに身を投げたら命がないことは明白だった。

（もし、僕がこれ以上生きながらえたら、あの一家だけじゃなくて他の村人たちとも付き合いをしていくことになるだろう。僕が村に長居をすればするほど迷惑をかける人数が増えていくんだ。それに、僕が責任をとって死んだと知ったら、いくらあの非情なゴルドでも、

一家を見逃してくれるかもしれない)

心を決めてアルスは深淵の間に歩を進めようとしたが、足が震えて動けなくなった。

(怖い……死ぬのが怖い……)

それはアルスがはじめて抱いた感情だった。

幼いころから戦士として育てられ、不名誉な敗北をしたときには死をもって償えと育てられてきたアルス。

彼にとって、死は躊躇すべきものではなく、不名誉を働いたときには、自らすすんで行くべきものだった。

実際にあの薬を飲む時も、何の疑問も持たずにそのまま口に放り込んだのだ。

だけど、今は死ねなかった。

アルスが崖下に足を踏み入れようとすると、脳裏におじさんやおばさん、レオナルドの優しい笑顔が浮かんでくるのだった。

胸から感情がこみあげ、やがて、暖かい液体が頬を伝ったのだった。

(涙……?)

物心のついたころまで記憶をたどっても、情などというものを理由



にして流した覚えのないもの。

それこそ、戦いで負けたときの悔しさくらいでしか流したことがないもの。

それが今になってあふれ出したのだ。

（誰にも見られてないとはいえ、こんなものを流すなんて恥辱だ。僕は、これでも名門道場で腕を磨いた剣士なんだ）

変わり果てた身になっても、誇り高い戦士としてのプライドがひらすらアルスの胸を締め付けるのだった。

10分間ほど嗚咽をあげた後、ゆっくりと立ち上がった。

「生きたい。帰ろう」

ゆっくりと、それでいながら、薄く積もった雪を踏みしめながら、アルスはもと来た道を引き返した。

その足跡はまるで、生まれてはじめて自分の意志で道を切り開いているかのようだった。

（ポジティブに考えるんだ。チャンスは2年間ある。その間にゴルドを説き伏せるか、あるいは隙を見て殺せばあの一家のピンチは回避できる。少なくとも、このまま死んで償って、見逃してもらおうなどという甘い考えよりは、その方がいくらか分の良い賭けかもしれない）

家についたころには地平線がほんのりと明るくなりはじめていた。  
家人は皆、静かに寝静まったままのようだった。

## 第6話 陽だまりの中で

「アリシアちゃん。そこの上の棚からシナモンをとってくれる？」

「はい」

アリシアは、やや低くなってしまった身長を補うべく、背伸びをして香辛料の入ったバスケットに手を伸ばした。

たった、2年しか与えられていない破滅への執行猶予期間。

その間に送ることのできる平穏な日常生活のありがたみを彼女は実感していた。

(もし、今こうして料理の手伝いをしている最中にゴールドがやってきたらどうなるだろう…)

アリシアは頭の中でシミュレーションをはじめた。

(狭い家の中で戦うとなると、大立ち回りはできないだろうから、剣は使い物にならない。台所にありそうなもので、護身用に使えるのは小型のナイフくらい。ドアや机も使いようによっては相手をひるませることができる。あとは……)

「アリシアちゃん？」

おばさんが心配そうに顔をのぞき込んでいた。

「あ、はい。ごめんなさい。ちょっと考え事をしていて……」

アリシアは、あわててバスケットの中からシナモンを探して手渡した。

「好きな男の子でもできたのかしら？」

予想外の言葉にアリシアは「あわわ」と驚いて、バスケットを思わず落としそうになった。

「冗談よ。どういう反応するかなと思って、言ってみただけ」

おばさんは生温かい目でアリシアを見ながら笑ってみせた。

(女の子の姿になっていたことをすっかり忘れていた。普通の人から見たら、僕が悩んでいる姿も、ただの恋煩いに見えてしまうのだろうか)

そう思うと、自分が悩んでいることなど、ちっぽけなもののようにアリシアには思えたのだった。

「さてと、朝食の準備ができたから、あのバカを呼んできて」

あのバカ。

おそらく、レオナルドのことを指しているのだろう。

瞬時に察してしまう自分もひどいものだとアリシアは軽く反省しながら、家の外に出た。

毎朝、自己鍛錬のために近くの山で剣の素振りをしている。

アリシアはそう聞かされていた。

「やあっ！とおっ！」

山から遠く離れたところからでも分かるくらい、威勢のいい掛け声が響いていた。

（うちみたいに暗殺術に片足突っ込んだ流派ではなさそうだ。どちらかというところと礼儀や精神を重んじる武道の類か）

アリシアは、当たっているかどうか定かではない加減な推測をしながら、レオナルドの姿を探し、そして、木がまばらな陽だまりの中に見つけた。

「えいっ！はあっ！」

レオナルドは息をはずませながら、大きなわら人形に木刀を叩きこむ。

寒い季節の割には薄着でうっすらと汗をかいている。

「ヘタクソ」

アリシアは思わず口を挟んでいた。

「なんだと！俺のどこがヘタクソだっていうんだ」

突然の訪問者に驚きつつも、間髪いれずに、レオナルドは言い返す。

「構えが隙だらけ。後ろから攻撃されたら一発でおだぶつだよ」

「ふん！女になにが分かるんだ！おふくろの前ではいい子ぶりやが  
つて！いつか、本性を暴いてやろうと思っっていたんだ！」

かっとなって突っぱねながらも、レオナルドはうつむいた。

迷いがあるようだった。

「どうすれば強くなれる……」

「脇をしめて肩の力を抜いたらいい。それを意識するだけでもマシ  
になるよ」

アルスは思いだした。

レオナルドと過去にどこかで会ったような記憶があったのだ。

だけど、それがどこだったのかが今の今まで分からなかった。

剣術大会の予選で戦った対戦相手。

我流と思われる流儀でやみくもに力任せに得物を振り回していた。

ちゃんとした師匠の元で指南を受けた経験がないことは明らかだった。

しかし、基礎も技術もないにも関わらず、時折みせる動きの鋭さには目を見張るものがあった。

辛うじて勝利を収めたものの、アルスは冷や汗を流したものだっ

（そうか。あいつか……）

アルスの脳裏には一つの考えが浮かんでいた。

（こいつに剣術を仕込んでみるのも悪くない。少しでも強くなったら、ゴールドが襲撃してきたときに足手まといが一人減って、戦いやすくなる）

そこまで考えて、アルスはふと我に返った。

一家を巻き込むことを前提にしている自分自身に対して嫌悪感を覚えたのだ。

（だけど、最悪の事態に備えておく必要があることには違いない。あらゆる可能性を想定して、どんなことが起きても、被害は最小限に抑えないといけない）

使いなれないたどたどしい女言葉でレオナルドをアリシアは誘ってみることにした。

「あたしの訓練を受けてみない？強くなることは保障するわ」

「いいのか？」

「もちろん！」

レオナルドが明るい顔を見せたのは初めてだった。



## 第7話 剣術修行と花嫁修業

「あー、疲れたー」

アリシアは部屋に戻るとスカートを肌蹴させ、大股を開いてくつろいでいた。

炊事、掃除、洗濯、それが終わったら、お花の稽古にお茶会。

ただの家事手伝いの域を一步飛び出して、まるで花嫁修業である。

(やさしいおばさんだと思っていたけど、意外としつけには厳しいんだよな。今、こつやってふしだらな格好をしているところを見られたら、どやされるに違いない)

こんなことになるのなら、素直にはじめから男だと名乗ればよかったとアリシアは後悔しはじめていたのだった。

(これからゆつくり、ゴールド対策を考えようと思っていたけれど、このままだと、なかなか時間も取れそうにないや。レオとも修業の約束をしたけれど、どうしたものか……)

うつぶせがちに枕を抱きしめながら、アリシアはうなりをあげていた。

「花嫁修業かあ。もし、そつだとしたら、僕を誰に嫁がせようとしているのやら」

おばさんが流れ者の娘を必死に育ててまで嫁がせようとしている相

手。

結論が出るまでに時間はかからなかった。

レオナルド。

この村には若い娘はいないとアリシアは聞かされている。

そうになると、この家は後継ぎを作るのに苦心しているに違いなかった。

(このまま、家事をみっちり仕込まれた後は、家族ぐるみで自然と僕をレオナルドとくつつけるよう仕向けるに違いない。優柔不断な僕は流されるままにその策略に乗せられちゃうのかもしれない。そして、やがては結婚。式では誓いのキスを……)

そこまで想像したところで、アリシアは生理的嫌悪感を覚えた。

(ぼ、僕は男なんだ！何が悲しくてむさい男なんかと結婚して、ましてや、あんなことやこんなことをしなくちゃならないんだ！冗談じゃないぞ！)

みだらな妄想を頭から打ち消そうとアリシアは悶絶していたのだった。

「すみませーん。レオナルドさんのご自宅はこちらでしょうか？」

低音で、それでいて安心感を与えるような声が家の中に響いた。

「はい。そうですー」

アリシアはあわてて服装を整えると、煩惱を追い払い、玄関の客人を出迎えた。

レオナルド本人はもとより、おばさんもおじさんも外出しているようだった。

「ボラムの街で開かれる剣術大会の出場の件ですが、レオナルドさんが出場の書類審査をパスしましたので、出場札を渡しますね」

くたびれたローブを着た老夫は早口でそう言うと、アリシアに木の札を手渡した。

「それじゃ、私はこれにて失礼」

要件だけを簡潔に伝え終わると、老夫はそそくさと出ていった。

札には大会名と出場番号、注意事項らしきものが書かれていたが、半分に割られており、何が書かれているのかは、はっきりと読み取ることができなくなっていた。

おそらくこれは勘合符なのだろうとアリシアは見当をつけた。

木札の残り半分は大会主催者側で管理していて、大会開催のときに本人確認をするために使うのだ。

（レオナルドのやつ、大した実力もない癖に懲りずにこんな本格的な大会に参加するつもりなのか？）

しかし、強くなるための手段として、目標を持つこと自体は悪くないともアリシアは思ったのだった。

（そつだ。いいことを思いついたぞ）

アリシアはいたずらっこのようなほほ笑みを浮かべた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

レオナルドが家に帰ってくると、アリシアが待ってましたとばかりに出迎えた。

その左手には木札を見せびらかすかのように掲げていた。

「それ、もしかして、剣術大会の出場札か？やった！書類審査通ったんだ！はは！ちょっと見せてくれよ！」

「いやよ」

「なんでさー！」

アリシアはチャガールがバトンを扱うかのように木札をくるくると回しながら右手に持ち替えた。

「出場したければ、2週間以内に、あたしからこの札を奪ってみなさい。それができないならば、大会に出ることは諦めることね」

## 第8話 若きレオナルドの悩み

俺の名前は、レオナルド。明日の一流の剣士を目指して師匠のもとで修業をやっている。

師匠が俺に与えた試練はシンプルだ。

剣術大会に出場するために師匠が手に持っている木札を2週間以内に奪い取れ。

師匠曰く、これすらも自力で奪い取れないようであれば、大会に出ても勝ち目はないという。

敏捷性を養うためにこのような訓練をする流派があるということは、耳にしたことがある。

おそらくそれは効果があるのだろう。

だけど、この訓練を行う上で俺には看過しておれない大問題が一つあった。

俺の師匠は女の子だったのだ。

きつと、この相手が例えば、老練の達人だったり、ガタイのいいマツチヨマンだったりするならば、俺は殴られるのを覚悟で木札を奪いにかかることができただろう。

だけど、彼女の細い腕、赤い唇、白い足を見るたびに俺は心がかき乱される。

木札を奪い取るためには、きっと彼女の体のどこかに触らなければいけないだろう。

ああ、神様！

いくら生意気なやつだとはいえ、女の子の体に触れるだなんて、俺がそんな大それたことをしていいのでしょうか。

12月8日 レオナルド

修行開始の3日目、俺はついに勇気を出して、彼女に向って全力で飛びかかることにした。

しかし、彼女はひょいひょいと目に見えないほどの素早い動きで身をかわしていった。

教えてやると生意気に言うだけのことはあった。

しかし、人並み外れたの身のこなしを彼女はどこで身につけたのだろうか。

女の身でありながら、これだけの動きができたなら、どこかの街で武術の名声を獲得していそうなものだが、それがこんな辺鄙な村にいるだなんて不思議なものだった。

12月10日 レオナルド

正攻法は無理だと察した俺は奇襲策にすることにした。

ぞうきんがけをしている師匠に忍び足で近寄ると背後から襲撃した。まるでやってることが変質者のようで情けなかったが、大会出場札を取り返すためには四の五の言っていられなかった。

しかし、案の定というか予想した通りというか、彼女は俺の存在を瞬時に察知すると、右手を軸に倒立をし、そのまま腕力でふわりと宙に浮かぶと、こちらにあかんべーをするのだった。

そして、肝心の俺は気付いたらその華麗な動きに見とれていた。

12月12日 レオナルド

俺はついに彼女が寝ている時間帯を狙って、札を奪い取ることにした。

これが男として恥ずべき行為だということは十二分に理解している。だけでも、こちらには絶対に大会に出なければならぬ、譲れないわけがあるんだ。

そっと、寝室に入ると、ターゲットはおふくると二人でツインベッドに横たわり、寝息をたてていた。

なんとという無防備。チャンスだと思った。

寝ているのにも関わらず、木札を抱きしめているようだった。



俺が深夜にやってくることは想定範囲内ということなのか。

と、いうことはだ。

ひょっとしたら、このまま寝ているところを全力で奪いにかかってもぱっと目を覚ましていつものように、ひょいと身をかわすのだから。

そついつつもりならば、遠慮はいらない。

全力をもって襲いかからせてもらうにしよう。

そう思った俺は、彼女の手首を押さえつけ、木札に手を伸ばした。

すると彼女は目を覚ますと驚いたのか急に叫び声をあげたのだった。

「きゃああああああ！」

家中にその叫び声が響き渡った。

「わわわっ！これは誤解だ！違うんだ！」

おふくろが目を覚まして、俺がアリシアの体をおさえつけている姿を目の当たりにした。

12月13日 レオナルド

今日はおふくろのお説教が堪えた。

「年頃の娘さんになんてことをするのっ！あんたをそんな子に育て

たおぼえはないよっ！」

いや、分かってるんだ。分かっているんだけどもっ！

俺はあの札を取り戻さなきゃいけないよっ！

必死で弁解したけれども、夜這いした言い訳にはならなかった。

あと、1週間か。こんな調子で本当に取り戻すことができるかな。

だんだん、自信がなくなってきたぞ。

## 第9話 アリシアの憂鬱

12月13日 アリシア

昨日の晩はびっくりしてもものすごい声をあげてしまった。

平常心を保つことを信条にしている僕としては不覚のミスだ。

深夜にレオナルドがやって来るくらいは予想していた範囲内だったし、寝ている間も警戒を怠らないつもりでいた。

だけど、昨日は、うっかり熟睡してしまっていたのだった。

男の僕があんなはしたない声をあげてしまうなんて恥ずかしい。

いや、確かに今は女の体かもしれないけれど、いつかは男に戻るつもりだし、男のプライドを捨てたつもりはない。

だけれども、暗がりの中、手首を押さえられ、組み敷かれたあの光景を思い出すと、レオナルドと廊下ですれ違ってもまともに顔を見ることができなかった。

今のぼんやり考え事をしている隙ならば、もしかしたらあいつも僕から札を奪い取ることは難しくないだろう。

だけでも、恥ずかしがっているのは向こうも同じらしく、僕と視線を合わそうとしなかった。

なんだか気まづくなっちゃったな。

12月14日 アリシア

レオナルドに呼び出された。

2人きりで話をしたいのだという。

あの夜のことを謝られるのだろうか。

それにしても、待ち合わせ場所が人のいない廃教会というのは大げさだ。

これじゃあ、まるで愛の告白じゃないか。

あいつが僕に？ははは……まさかね。

修行中にさんざん憎まれ口を叩いてきた僕が好かれるわけないじゃないか。

昼上がりの寒空の下、レオナルドと落ちあつと、老朽化できしんだ扉を開き、教会の中に入った。

ほこりっぽくて蜘蛛の糸も張っている。静かだ。

秘密の話をするにはふさわしい場所だった。

ここならば、あんなことやこんなことも……って何を考えてるんだ僕は！

こんな妄想をするようになるなんて最近の僕はどうかしてる。

話を切り出したのは向こうだった。

「俺、好きな女の子がいるんだ」

「そっか」

僕への告白じゃなくて良かったと安心しているのが半分、そんなことを相談するなんて意外だという驚きが半分だった。

「去年もボラムの街で剣術大会に出たんだけどさ。そのときに宿を貸してくれた家に俺と同じ年くらいの女の子がいたんだ。俺は一目ぼれした。誰にでも優しく笑顔がかわいくて、もしも、天使がこの世にいるとしたら、あんな感じなんだろうな。俺はどんなことをしても彼女を手に入れたくなかった。だから、俺は彼女の前で優勝して、そして、そのまま彼女に思いを伝えたいんだ」

そこまではほっこりとした顔で語ったが、次は視線を落とすうつつむいた。

「俺はこれまで、そうやって彼女へ一途なつもりでいた。だけど、あの晩、俺は女の子、そうあんなを押し倒してしまっただんだ。それは彼女へ対する浮気なんじゃないかと思った」

「そんな気になしたことないのに。その彼女とやらも、そんなこと気にしてないって」

こっちのフォローを聞いているのか聞いていないのか、うつむいたままレオナルドは話を続けた。

「いや、本当に悩んでいるのはそこじゃない。このまま大会に出れないと、彼女に会うことすらできないんだ。あんたは札を奪い取れと言うが、あんたの身のこなしと己の実力を比べると、あと1週間でそれができるとは思わない。だから、頼みたいことがある。修行だなんて言わずにその札を返してくれ。俺はとにかく彼女に会いたいんだ！」

それは心の底からの悲痛な叫びのようだった。

だが、僕は心を鬼にすることにした。

「そうやって、迷っている間は大会に出ても勝ち目はないわね。大会に出て彼女にいいところを見せたければあたしから札を奪い取ってみませい。そして、彼女の前であなたの勇姿を見せてやりなさい」

## 第10話 ふとした疑問

12月15日 アリシア

レオナルドの動きが以前と比べて格段に良くなった。

本人には自覚がないようだが、一日ごとに動きが着実に洗練されている。

女だからという僕への遠慮も、もはや微塵も感じない。

その目には僕から意地でも札を奪い取って、彼女に会ってやろうという意思の強さだけが宿っていた。

だが、意思の強さは逆に焦りを生み、余裕のなさを生じさせる。

僕が軽く足払いをしてやるだけで、いとも簡単に倒れてしまう。

倒れた後は間髪いれずに起きあがり、立ち向かってくる。

何をそんなに焦っているのだろうか。

このままでは片思いの彼女に会えないからか。

今年がダメでも、来年会えばいいではないのか。

それとも今年ではないといけない理由があるのだろうか。

分からないことだらけだ。

ただ、その執念が僕に立ち向かう原動力になっているのは事実であり、僕はそれに対して応えてやるのみだ。

12月16日 アリシア

今日はおばさんに連れられて仕立て屋さんへ行ってきた。

おばさんは服をたくさん持っている方だったが、それでも僕と2人で着回すには足りなかったからだ。

到着した服屋は小さな街ではあるが、メインストリートにたたずんでいて豪商と思しき客も出入りしている風だった。

不思議だった。

数十年前に炭鉱が閉じてからはずっと貧しいか村であるかようにおばさんたちは言っている。

だけど、夜になれば暖かい暖炉の前で家族の団欒を楽しむことができ、僕みたいな新しい家族ができるところやってオーダーメイドのお店で服を買ってくれる。

少なくとも僕が生まれ育った首都に暮らす平均的な家庭よりかは、いくらか裕福なようにみえた。

家業の鍛冶屋が儲かっているのだろうか。

よほど腕のたつ職人なのかあるいは……。



興味のあるところではあったが、おじさんは自分の仕事については口を噤む人だったし、レオも自分の父親について語ることも少なく、居候の身として僕も積極的に聞く様な真似はしなかった。

それにしても、こつやつて、一度、疑問を持ち始めてみると謎の多い家庭だ。

ごく普通の田舎のごく普通の家庭だと思っていたけど、そうではないことが日に日に分かってくる。

さて、肝心の買い物だが、店に入ると仕立て屋さんとおばさんは2人して僕に色んな服を勧めてきてくれた。

だけど、この年まで男として剣客として育ってきた僕にとっては、婦人服の流行というものがさっぱり分からない。

何を選んだらいいのかさっぱり分からないし、予算を超えるものを頼んでしまったら申し訳ないので、おばさんの趣味に完全に任せることにした。

たぶん、そんな変な服は頼まないだろう。

うん、頼まないはずだ。

12月17日 アリシア

修行の札を取り戻す期限としてレオに提示した日まで今日も含めてあと3日。

ここにきて使うフェイントの種類がやたらと多彩になってきた。

あいつなりに研究しているのだろう。

だけでも、僕もそれなりの熟練者だ。

あいつの考えそうなこけおどしはだいたい僕も試したこともあるし、  
交わすくらいはお茶の子さいさいだ。

それにしても何か一つ忘れていたような気がする。

僕が使ったことのない方法でそれでいてあいつがやりそうな何かを。

## 第11話 鬼ごっこの終焉

12月18日 アリシア

長かった鬼ごっこの終焉は突然訪れた。

窓ふきでよそ見をしている間に隙を見て僕から札を奪い取ったのだ。なるべく集中力は切らさないつもりでいたし、実際、奪われたときもある程度の注意を払っていた。

だが、僕が気配を感じ取ったときには既にレオの手が僕の懐に伸びていた。

瞬時に反応したが、レオの動作のほうが少しだけ早かった。

「やりい！」

レオの満面の笑みを見たときには、嬉しいのが半分悲しいのが半分だった。

男の頃だったら、こんなに簡単に奪い取られなかったのになあ。

僕はたくましくなったレオにまぶしさを覚える一方で、瞬発力がなくなってしまうた自分にわびしさを覚えたのだった。

12月19日 アリシア

修行は次の段階に移った。

竹刀を使った実践的なトレーニングだ。

鬼ごっこで遠慮がなくなったレオもさすがに僕を竹刀で叩くことは躊躇するようだった。

どうやって、やる気を引き出すか考えないといけないな。

12月20日 アリシア

仕立て屋の仕事は思ってたより早く、注文していた服が二セット届いた。

一着は、麻と思われる材質でできたローブ。

下半分がスカート状になっているのが、かつて男だった身としては少々心もとないが、それでも、機能性はいくぶんか配慮されているようで比較的動きやすい。

デザインも質素なもので、村で着ていてもおそろく浮くことはないだろう。

もう一着が問題だった。

これでもかというくらいに袖や襟がレースで装飾されたロングドレス。

それを着用するにはコルセットや詰め物が必要なようで、着衣するだけでも相当な時間がかかるであろう代物だった。

こんなもの、庶民がどこで着るんだという疑問が沸々とわき、それをぶつけてみると

「本当は女の子がほしかったんだけどレオは男の子でしょ？だからアリシアちゃんが来て、娘ができたと思って思わず張り切っちゃったのよ」

と、返ってきた。

答えになってなくて納得できない気持ちやら高い買い物させてしまったことへの申し訳なさやら複雑な心境だ。

このまま、この家に長居すると、我が子のように親切にしてもらって、だんだん居心地が良くなって、しまいには定住したくなる。

それが今の僕にはいちばん怖いことだった。

このまま、暖かい家庭というぬるま湯に浸って、そのなれの果てに待っているのがゴルドによる一家虐殺。

それだけは避けなければならぬことだった。

今の僕に何ができる。

今はレオを鍛えることだけで自己満足に浸っているけれど、そんなものは何の根本的解決にもならないのではないか。

次の手を打たないといけない。

しかし、その次の手というものが頭に浮かばないのだった。

## 第12話 好きな人はいますか？

12月22日（1/3） レオナルド

「あなたには好きな人がいますか？」

それは通常は和やかな席で交わされる質問だ。

お酒の席であったり、剣術の訓練の合間の小休止であったり、そういった場で気心の知れた者同士が、さらに相手のプライベートを深く知る目的で投げかける。

初対面の相手に投げかけることはまれであるし、ましてや、命のやりとりをしているような相手にそういったことを訊くのは考えにくい。

しかし、その考えにくい質問を相手は俺に投げかけたのだ。

その相手はスミスと名乗った。

偽名によく使われることで有名な名前だ。

高い身長で筋肉質。普段から体を鍛えている風体だった。

その反面、歯は欠け落ち、髭の生やし方も著しく左右非対称でいびつ、ひとたび言葉を放つとはなはだ不快な口臭が漂う。

俺は女というものとそれほど会話をしたことはないが、女という連

中が清潔感がない、生理的嫌悪感を覚えるなどとたまにどこぞの男を形容することを何度か耳にしたことがあった。

それは、おそらくこういつた男のことを指すのだろう。

俺はこの男を一度見たことがあった。

2週間ほど前の夕食後、訪ね人がいると家の扉を叩き、非礼な振る舞いから、おふくろと口論をしたのだ。

その男が今もこうして、この村をうろついているあたり、その訪ね人は見つからないのだろう。

俺は決して、人生経験が豊富ではないし、ましてや、人を見る目が養われているとはいいいがたい。

それでも、この男は堅気の人間ではないことはおおかた察しがついた。

この男が今日、突然、剣の修業をしている俺のところを訪ね、こう尋ねたのだ。

「お前は好きな女がいるか」と。

「なぜ、そんなことを聞く」



俺は質問を質問で返した。

とりたてて隠したい事柄ではなかったが、ほぼ面識のない相手に素直に答えるのには直感的に抵抗を感じたからだ。

「お前の返答次第では死人が出るかもしれない」

低くドスのきいた声で俺の耳元でささやいた。

本気なのか、はたまたこけおどしなのか。

全く判別はつかなかった。

ただ、そこまで言われてしまった以上は無意味な隠し事をする事には利益がないと思った。

「いる」

「それはこの村でアリシアと呼ばれている女か？」

（違う）

その気になればそう即答できる質問だった。

だが、この男が返答次第では死人が出ると言ったことが引っかかる。

この男は俺にどういった答えを期待しているのだろうか。

仮にイエスだと答えたら、あるいはノーと答えたら誰を殺すつもりなのだろうか。

あるいは、好きな人がいると答えた時点でもう既に間違いを犯してしまっていたのか。

疑問はつきなかった。

そもそも、この男が他人に手をかける前に自分がこの男を倒すべきなのか。

あるいは大声を出して助けを呼ぶべきなのか。

そういったことまでもを頭の中で検討しはじめると、沈黙の中、時間だけがいたずらに過ぎゆくのだった。

### 第13話 ゴルドの異常な愛情

12月22日(2/3) レオナルド

「やっぱり、アリシアのことが好きなんだな……」

スミスという男は確認するかのように訊いてきた。

おそらくやつは俺が彼女のことを思っていて、それを正直に話すことへ照れがあると、この長い沈黙を解釈したのだろう。

だが、あいにく、俺は他に思い人がいる。

アリシアは可憐な外見をしているとは思いつし、美しさに見とれてしまったことがないと言えは嘘になるが、決して本命の相手ではない。

正直に答えるとするならばNOということになるだろう。

しかし、俺が口に出したのはその本音とは全く逆の内容だった。

「ああ、俺はアリシアのことが好きだ。愛している」

おそらく、この闇社会で生きているであろう男は、理由は分からな  
いがきつとアリシアのことを殺しに来たのだろう。

だけど、彼女の身辺捜査をしているうちにやつなりに情がわいてし  
まった。

もし、彼女に思われ人がいなければ迷うことなく殺し、いれば殺す

のをやめる。

そういうシナリオならば、返答次第では死人が出るという発言もつじつまが合った。

そういった仮定の元、出した答えはイエスだ。

こういうときは嘘も罪にならないものだ。

俺の考えすぎならばそのときはそのときで後で訂正すればいい。

「そうか。好きか」

そう言うと、スミスはそれまでの強面が嘘かのように柔らかい笑顔を浮かべ、しみじみと語り始めた。

「俺には初恋の人がいた。南国の青い海のように澄んだ瞳をした美しい娘だった。若かった俺は果敢に彼女に何度もアタックした。だけど、彼女は醜い俺に一度たりとも俺に振り向くことはなかった。時には軽蔑の眼差しさえ向けさせた。彼女は強い剣豪と恋に落ち、そして結婚をした。そのときは三日三晩泣いたものだよ……俺はそれでも諦めきれずに、その剣豪の弟子となって彼女といい関係になれないかチャンスをつかっていた。そんなある日だよ、彼女が病魔にかかって死んだのは」

そこまで語るとスミスは視線を外し無防備な格好になった。

今なら待ちに待ったこの男に奇襲できるチャンスだ。

これで、アリシアはピンチから逃れることができるかもしれない。

だけど、俺は行動を起こさなかった。

この男の話の続きを聞いてみたくなつたからだ。

「彼女は剣豪との間に一人の息子を遺した。息子はすくすくと成長して、10歳くらいになつた頃には母親と顔が似てきやがつたんだ。俺は心がかき乱された。母親の面影をもつそのガキをどうにかしてやりたいと考えるようになった。俺はホモセクシャルな考えをそれまで持つたことがなかつただけに自分でもショックだった。だが、その欲求も長くはなかった。息子は思春期を迎え変声期を経てだんだん男らしくい体つきになつてきたんだ」

「それがアリシアとどんな関係があるんだ？」

俺は当然の疑問をぶつけた。

すると、男は高笑いをはじめた。

その目には狂気が宿っていた。

## 第14話 狂気のカタルシス

12月22日(3/3) レオナルド

「アリシア！彼女の姿をはじめて見たときには全身に電撃が走るようだった。透き通るような瞳に薄い唇。完全に俺の初恋の人の生き写しだったからだ。俺は彼女のことをもつと深く知りたくなった。己がものにしたくなった」

スミスは己の世界に没頭しており、こちらが抜刀の構えを見せていることに気にも留めていないようだ。

いっそのことひと思いに殺ってしまおうか。

こいつは危険人物だ。

アリシアを深く傷つけようとしている。

それなのに、剣の柄を持つ俺の右腕は震えが止まらなかった。

人なんて殺したことねえよ。畜生！

こちらの心境を知ってか知らずか、スミスは目をむき熱弁をふるい続ける。

「これは初恋のあの人への復讐なのかもしれない。俺はアリシアが追い詰められ、絶望した顔を見ると、とても快感を覚えるんだ。そうだ。これは一種の復讐かもしれない。俺に一度たりとも

振り向いてくれなかった女が俺の手の内で悶え苦しむ姿は一種のカタルシスだ。彼女の顔が歪めば歪むほど我が汚れた魂は浄化されるのだ」

「サイコ野郎め。アリシアはお前の好きな女と関係ないだろ。いい加減にしろ！」

思い切って抜いてみたその刀は手を離れ宙を舞い、やがて草むらに綺麗に突き刺さった。

しまった。力みすぎた。

実践を経験していないことが、こんなに心もとないとは思わなかった。

「ところが関係が大ありなんだよ」

こちらが攻撃に出ようとしたことについて、向こうは特にコメントする気はないようだった。

「さっき話した、俺の初恋の人の息子、それがアリシアだ」

その言葉の意味を瞬時には飲みこめなかった。

アリシアは女だ。

「どついつの意味だ」

「本人に聞いてみるといい」

そういうと、にたりと口を歪ませた。

さっきまでの話から察するに俺がそれをアリシアに聞くと、彼女はとても困るのだろう。

そして、彼女が困る姿を想像して、おそらく、こいつはさっき言っていたカタルシスというものを感じるのだろう。

反吐が出る話だった。

スミスはその場から去り、俺だけがぼつんと遺された。

情けない限りだが震えて手出しができなかった。

こんなことで俺は剣術大会でいいところを見せようとしてるんだからお笑い草だ。

家に戻ると何も知らないのか、アリシアは「おかえりなさい」と優しく俺に微笑みかけた。

あいつが言った通りこいつは男なのか？

全くそうは見えなかった。

第一、気を失っていた時、おふくろはこいつの着替えの世話をしているはずだから、男ならばそう言うはずだ。

「お前は男なのか」と好奇心で訊いてみたくなっただが、それについ



ては今は保留することにした。

スミスの思い通りに動くのは癪に障る。

今の俺に出来ることは何事もなかったかのように平静を装うことだけだった。

「ただいま」

第15話 少年が成長するとき（前書き）

## 第15話 少年が成長するとき

12月23日 アリシア

レオのやつが太刀筋が急によくなった。

ふっきれたかのように僕の方へ太刀を叩きつけるようになったのだ。

これまでは腫れものに触るかのように遠慮し、あえて急所からは狙いを外して攻撃を仕掛けてくるので、僕は飄々ととびはねながら返り討ちに使っていたのだが、そういった遊びを入れる余裕がなくなってしまった。

レオの技術が突然あがったというよりは彼の内面で何かが変わったというのが表現としては正しいだろう。

勝負根性がついたというか、度胸があがったというか、凜としたその表情は今までとは別人のようだった。

格好いいなとしばし見とれてるが、幾分かして我に返る。

男の身でありながら、男を見て胸を高ぶらせるなどとは正気の沙汰ではない。

このままでは心まで女に染まってしまうのではないか。

そのような恐怖を胸に抱いたのだった。

12月26日 アリシア

レオにはじめて一本をとられた。

油断していたところを間髪入れずに一太刀、二太刀と叩きつけ、手がびびれて竹刀を落したところを拾おうとしゃがんだところを、肩をびしっと叩かれた。

それほど痛くないあたり、多少は手加減をしているようだった。

完敗だ。

いつかは越えられる日が来るかと思っていたが、それがこんなに早く来るとは予想だにしていなかった。

それだけ、レオの潜在的な才能は僕が思っていた以上なのだろう。

もちろん、女の身になり、身体能力が衰えているというのもあるだろうが。

「やはり、女の体だな。本気で立ち向かうのはこれきりにしよう」

レオはそうぽつりとつぶやいた。

引っかかる言い回しだった。

単に女だとは言わずに女の体と僕のことを表現した。

それは僕の正体が男あることを知っているかのようにもとれる言い方だった。

その言葉の真意を訊いてみたくなかったが恥ずかしくなってやめた。

これまでの僕は別人の姿になったことに浮かれて羽目を外し、かわいごぶりっこしていると言われても仕方ない調子だった。

そのような僕の正体が男だと知れるという状態は、到底、羞恥心に耐えることができるものではなかった。

それこそ、「お前、男のくせに情けなくはないのか」なんて指摘された日には三日くらいは一睡もできずに、延々と悶えるに違いなかった。

レオに何を言われるかと恐怖し、心臓の鼓動が激しくなったが、次のセリフはごく平和的なものだった。

「これまで剣術のいろはを教えてくれて本当に感謝している。ありがとう」

「あ、どうも」

レオが白い歯を見せた後、こちらに深深と一礼すると、僕は拍子抜けして、礼を返した。

レオは基本的に礼儀正しいのだった。

「今度は俺があんたにお返しをする番だ。詳しい事情は知らないが、あんた、何者かに追われているんだろ？変なやつがやって来たら俺が返り討ちにしてやるよ。まかせとけて！」

今のレオの実力は到底ゴールドに及ぶものではないのだが、不思議とその言葉には説得力が宿り、頼もしさがあった。

だけど、その一方で、男のくせにまるで守られヒロインのような立場に甘んじている自分の無力さに齒がゆさを僕は感じていた。

やはり、僕はこの家を出ていくべきなのか。

もし居続けるにしても、何かこの家の人たちのために出来ることはないか。

近いうちに決断しなければならないな。

## 第16話 真夜中に二人で…

12月27日 前半 レオナルド

ふと、何者かの気配を感じて目を覚ました。

あたりはまだ暗闇に包まれている。

それでいて、静寂に支配されている。

そうだった状況から察するに時間帯はまだ真夜中といったところだろうか。

廊下の軋む音がわずかに聞こえる。

ここ数週間に仕込まれたトレーニングの間に俺の感覚は鋭敏になっていた。

以前だったら、このような気配に感付くこともなく、ひたすら眠りかけていたに違いない。

侵入者がやってきたのかもしれないと思い、俺はベッドの下に置いていた剣に手を伸ばす。

足音の主は俺の部屋を通り過ぎ、そして、階段を下りて行った。

俺の部屋を通らないといけな部屋は一つしかなかった。

アリシアとおふくろが横たわっている寝室だ。

俺は動揺した。

もし、足音が外部の何らかの悪意を持った人間のものであるとするならば、その主は既に寝室で用事を済ませて、これから家を出ようとしていることになる。

そして、その気配にあのアリシアが気付かないはずがない。

それにも関わらず、侵入者は着実に一步一步、歩みを進めていく。

おふくろもアリシアも、もう、賊の手に落ちてしまったのか。

アリシアをもろともしない相手に俺が太刀打ちできるか。

寒さと怖さで震えながらも、俺は覚悟を決めると、階段をゆっくりと下りて行った。

1階に下りると、既に人の気配はなかった。

もう、外に出てしまったのか。

思い切って、玄関の扉を開き飛び出し、あたりを見回した。

居た。



防寒用のローブに身を包んだ背の低い何者かが、村の出口に向かってゆっくりと歩いていった。

「誰だ！」

叫ぶと、驚いたように影は全速力で逃げ出した。

俺は必死で追いかける。

全力で走っているつもりなのに距離はどんどん離されていく。

（このままでは逃げ切られる）

そう考えはじめた時だった。

影はゆっくりと走る速度を落とし、やがて止まりこちらに振りむいた。

漆黒に揺らめく長いまつ毛に青い瞳。

影の正体はアリシアだ。

彼女は目を合わそうともせず、申し訳なさそうに俯きがちでいる。

「どづいつつもりだ」

「しゅめんなさい」

「謝るだけじゃ分からないだろ。事情を話してくれないと」

一陣の風が吹き、ローブがなびいた。

「七日……七日だけ、大事な用事があるから家を離れたいの。七日たったらすぐに返ってくる。あなたに迷惑はかけないわ。だから、ここは見逃して」

七日という日数をやたらと強調する。

「質問の答えになってないな。事情を話してくれと言っただ」

迷っているようだった。

伏し目がちでいて、時々、ちらちらとこちらを上目遣いでこちらの様子をうかがってくる。

「今まで記憶喪失と言っていたが、それも嘘だったのか？言えないような過去を持っていて、それを俺たちに話すのがは嫌で、黙っていたのか！」

つつい、しびれを切らして責めるような口調で言ってしまった。

彼女が見せる泣きそうな表情を見て、それは失敗だったと俺は反省した。

## 第17話 涙の意味

12月27日 後半 レオナルド

しばしの沈黙の後、話を切り出したのはアリシアの方だった。

「知り合いの錬金術師のところに行って薬を調合してもらってくるだけ。そしたらまた、戻ってくるわ。その往復に一週間かかるの」

「具合が悪いのか？それならば、病人のお前が行かずとも俺がお使いにいってやるよ」

「ううん……。私でないと、錬金術師さんにうまく事情を説明できないの。だから、何も言わずそこをどいて行かせて」

アリシアが横をすり抜けようとしたので、俺はおせんぼうをした。

「いくら剣の腕があるからといって、そんなよく分からないところへ、女の子を一人で行かせるわけにはいかないだろ」

「女の子」という単語に対してアリシアはびくついたような反応を見せたように俺には見えた。

やはり男なのか？

男だから、女の子として扱われることに対して後ろめたさのようなものを感じるのか？

「少なくとも今でもあなたよりは剣の腕はあるつもりでいるわ。女の身だからって侮らないで」

「この前、俺に一本取られたじゃないか。油断していたら、俺くらいの程度の使い手にもやられる可能性だってあるんだろ。このあたりも決して治安がいい方ではない。どうしても行きたいというのなら、俺も護衛についていくさ」

「あなたたち家族に迷惑をかけるわけには……」

「今でも十分迷惑をかかっているんだよ！」

俺はアリシアのあまりにももの分からずやっぴりに思わず怒鳴りつけてしまった。

ピンタしようと手を振り上げたが、振り下ろすのは思いとどまった。

暴力では何も解決しない。

余計に相手が心を閉ざすだけだ。

「自分一人で不幸を抱えて、悲劇のヒロインぶってるんじゃないよ。困ったときはお互い様だろ。どんどん頼ってきてくれよ。あんたがどんなつらい過去を背負って生きているか俺は知らないけどよ。それでも色んな人の助けがあって、ここまで大きくなってきたんだろ。一人で何でもかんでも解決しようなんていうのはとんだ甘ったれだぜ」

俺はスミスに会って以来、アリシアに対してつのりにつのった感情をぶちまけていた。

「だから、話せる範囲でいいから俺に話してくれ。そして、その錬金術師とやらのところまで護衛させてくれ」

アリシアは涙を流していた。

きつく言いすぎたかと思って謝ろうとしたが、「うれし涙だから」と断ってきた。

「何を考えているのかよく分からないやつだ」と俺はため息をついた。

アリシアによると、彼女はあるいきさつで飲んでしまった薬の作用によって、身体能力をフルに活用できなくなってしまったのだという。

剣の腕もかつてより衰え、身のこなしも悪くなった。

そこで、その薬を作った錬金術師のところに出向いて、解毒剤を作ってもらおうというつもりらしい。

その薬の作用とやはもしかして男を女にする薬なのかと訊こうと思ったが、今日のところはやめておくことにした。

そこはアリシアが隠したがっているところのようだし、急いで訊きだすこともないだろうと思った。

俺は荷物をまとめ、置手紙を残すとアリシアと二人、村の門をくぐった。

## 第18話 山賊少年

12月28日 昼頃 アリシア

寒空の下、名も知らぬ広葉樹林が自然の迷路を形作っていた。

今歩いている山道は主要都市の間を結ぶナブ街道にまで続くまがりくねった小道であり、人の往来も決して多い方ではない。

村を出てからすれ違った相手もせいぜい3人程度の老人たちくらいで、レオが会釈をしたあたり村の顔見知りであろうことが分かる。

それでも、ところどころに崩れかけた手すりがあったり、凝った意匠の橋がかけられていたりして、かつては炭鉱街への道として整備されていた面影がわずかに残っていた。

このあたりは治安が悪いらしい。

特に夏場になると、樹林が生い茂り、賊が隠れることのできる死角がたくさんできるのだ。

村人たちは国の警備隊にパトロールの強化を嘆願したが、もはや、産業的に重要ではないこの地域の住人を守るメリットはなく、放置され、見捨てられたような状態である。

もともと、今は冬場なので、賊たちの活動の主要な活動拠点は他に移っているようで、村と街を往来するにはちょうどいい季節であった。

山賊など出るはずがない。

僕も、そしてレオもそうして油断していた。

だが、襲撃者は突然やってきた。

「たああああああああっ！」

大きな叫び声が間近に聞こえ、僕とレオは身構えた。

左右を見て次に後ろを見る。

誰もいない。

そうになると、襲ってくる場所は一つしかなかった。

上だ。

僕は手提げカバンを盾の代わりにして襲撃者の攻撃を受け止めた。

僕は腕に痺れが走り、少し横によるめいた。

足腰の踏ん張りが男の頃よりも弱っていた。

昔の僕ならば、こんなことないはずなのに。

計算外のよろめきに対し、間髪いれずに賊は足払いを入れてきた。



「きゃあっ！」

女みたいな叫び声を出してしまった自分自身に驚き、思わず僕は後ろに倒れてしまった。

賊は僕からカバンを要領よく奪い取ると、走り去ろうとしたが、そこにレオが刀を鞘に入れたままの状態で脇腹に叩きつけた。

「ぎゃっ！」

賊はずしりと音をたてると前のめりに倒れ頭を打った。

なんてことだ。

完全にレオに助けられた形になってしまった。

剣豪を自負しているにも関わらずなんとも情けない話だ。

僕とレオが剣を抜き、困むと観念したかのように、仰向けに寝転んだ。

顔を見るとそれはまだあどけない顔をした10歳くらいの子どもであることが分かった。

「殺せ……」

息を切らせながらそうつぶやいた。

「おいらは、どの道、殺される運命なんだ。それならいつそのこと  
ひと思いに楽にしてくれ」

視線は焦点を合わせず上の空だった。

僕はこのような子どもを今までたくさん見てきた。

街では捨て子が盗賊に拾われることはよくあることだ。

捨て子に幼い頃から、盗みや殺しの技術を覚えさせ、そして、実践  
投入する前に、試験として旅人を襲わせる。

そして、その結果、ものになると判断されれば、一人前と認められ、  
そつでなければ落伍者として『処分』される。

きつとこの子も、どこかから今の一連の仕事を監視されていて、そ  
して、失敗したので『処分』の対象と見なされるのだろう。

「殺される運命って一体どういふことなんだよ？」

レオは分かっているようだったので、僕はかいつまんで盗賊の流  
儀について話した。

「お前はなんでそんなこと知っているんだ」と言いたげな表情を浮  
かべながらも、素直に聞いていた。

「よく分かんねえけど、こいつは、命を狙われるわけか」

「ええ。盗賊の組織に深入りした以上は、生かしておくと彼らにとつて、色々とまずいから……」

ここまで話して、はたと気がついた。

与えられた仕事を失敗し、死を命じられ、それに素直に従う。

それはほんの少し前までの僕と全く同じ境遇なのではないかということ。

ごたごたに巻き込まれないように、情を捨て、少年を見捨て、この場をそつと立ち去ろうと提案しようと思っていたが、それがここにきてその気が一気に消え失せてしまった。

「こいつを助けてやりたいと思っているだろ？顔にそう書いてあるぜ」

僕の方を見ながらレオは笑顔でそう言いながら剣をしまい、次に少年に声をかけた。

「よし！おまえは今日から俺の子分だ！盗賊なんかにびくびくしなくていいから、俺に付いて来い！」

「だ、だめだよ！あんたら！おいらと一緒に歩いたりなんかしたら、うちの親分に命狙われるぜ！死ぬのはおいらだけで十分だ！」

「じゃあ、その親分とやらと話し合おうじゃないか。アジトに案内してくれよ」

「無茶苦茶だぜ。あんちゃん。死ぬ気か？」

「死ぬ気になれば何でもできる。なーに任せとけ」

レオは自分の胸をどんとたたいた。

「そういうわけだから、ちょっと寄り道していいか？」

急に声をかけられあわてたが、僕はこくりとうなずいた。

レオは日に日に男らしく頼もしくなってきた。

## 第19話 捨てる神と拾う神

12月28日 夕方 マルコ  
えらいことになっちまったぜ。

親方から簡単な盗みの試練を与えられて、それをちよちよいと軽くこなして一人前の盗賊して認めてもらっておいらは晴れて大人の仲間入りをするはずだった。

晴れて大人デビューして、今までさんざん、おいらのことをウスノ口だの根性無しだのとバカにした連中のことなんて見返してやるうなんて思っていた。

それがどうだ。

こいつくらいはチョロいだろうと目星をつけた小柄な姉ちゃんからバッグを奪い取とうとしたまでは良かったが、攻撃をしっかりとガードされて、しかも同伴していた兄ちゃんに脇腹を殴打されて、そのままばったりと倒れてしまった。

気が付いたら取り囲まれてて刃の先を突き付けられていた。

辺鄙な村からやってきた2人組だから、大したことはないだろうと高をくくってたのが、とんだ誤算だったぜ。

試練に失敗したものは死あるのみというのが盗賊の掟だ。

おいらも、潮時か。

短い人生だったな！

あばよ！とそう思っていた。

ところが捨てる神があれば拾う神があるものだ。

2人組のうちの兄ちゃんの方がどういう気まぐれなのか親分に交渉して命を助けてやるなんてことを言いだしたんだ。

だから、アジトに案内してくれっさ。

これにはさすがのおいらも呆氣にとられちまったよ。

こんな世間知らずな人間がいるなんて信じられないぜ。

盗賊の親方ともあろう人間が、どこの馬の骨とも知らない旅人を相手にまともに取り合うわけがないじゃないか。

そもそも、盗賊の首領たるもの、アジトの場所を堅気の人間に知られた日には、そいつを生かして返すわけがない。

それこそ、兄ちゃんが公安に知らせたりしたら、盗賊一党、一網打尽にされるに決まってるし、親方だって組織の長としてそれは否が応でも避けたいはずだ。

だから、おいらはアジトにいくなんて、自ら死に行くようなもんだと、やめておいた方がいいと、口をすっぱくして何度も言ったんだよ。

だけど「大丈夫だ。任せておけ」ってまともに取り合わない。

この兄ちゃん、もしかして、バカなのか？

姉ちゃんの方も、兄ちゃんに任せるだなんて言い出すでしょうもない。

ま、おいらの命は一度捨てて、この2人に預けたようなものだし、あんまり偉そうには口を出せないんだけどさ。

そんなこんなで、活動の拠点の一つにしている山小屋に着いて、仲間に事情を話したんだけど、当然のように「親方の居場所を教える気はない」「さっさと責任とって死ね」とか、冷たいというか事務的というか、当たり前といえば当たり前前の洗礼を受けた。

そしたら、兄ちゃんは「会わせてもらうまで居座る」だなんて言い出すんだ。

仲間もそれは困るみたいで「力づくで追い出すぞ」だなんて脅すんだけど、そしたら、姉ちゃんの方が何やら仲間に耳打ちしたんだ。

すると、仲間は一気に青ざめて、親方を呼ぶだなんて言い出したんだ。

何をささやいたんだろう？

この2人組は一体何者なんだ？



## 第20話 対決！盗賊の親分

12月28日 夜 アリシア

盗賊の親方という存在と実際に会ったことのあるという人は市井の中にはなかなか見当たらないもので、たいていの場合は、物語や講談の類で伝聞するのみである。

その中で多くの人がステレオタイプとして思い描くのが酒に強くて粗野な豪傑の姿である。

人々の空想の中で生きている山賊は、たいていが刹那的で自己破壊的な生き方をしており、後先を考えずに残虐非道な略奪を繰り返す。

しかし、そのような破滅的なスタイルをもつてして長続きした盗賊団というのは、現実にはそうはいないもので、ある程度の規模の大きい盗賊団となると、優秀な頭脳が組織を潰さないように暗躍している。

今、レオと向かい合って座っている盗賊の頭はそのような頭脳派タイプであるように僕には見えた。

青白い肌をして、目は窪み、他の盗賊たちと比べても、明らかにやせ細っていた。

髪は七三にびしっと分けられており、第一印象では病弱でモラリストな文学青年といったたまたまだ。

「君はマルコのやつを自分の付き人にしたいと、そう、言うのだね」

大人の男性にしては高めの、まるで裏返ったような声で頭は話を切り出した。

「そうだ。だから、あんたのところの盗賊団から足を洗わせてやってくれないか」

「嫌だね」

即答だった。

「そいつは、赤ん坊の頃から、我々が手塩にかけて盗賊の流儀を仕込んだんだ。今さら、堅気の世界に返すことなんてできると本気で考えているのかい」

「そこをあんたを男と見込んで頼んでいるんじゃないか」

「そんなマッチョイズムな理想論を振りかざされても困るね。盗賊の世界はシビアなんだ。もし、そいつを堅気の世界に戻したらどうなる？いつ自警団なり公安なり、我々を退治しようとしている組織に肩入れして、情報を流さないとは限らない。これは我々にとって死活問題なんだ」

そう言うと、頭は見せつけるように狩猟用のナイフを床につきたてた。

彼なりの恫喝の手段なのだろうが、レオは眉ひとつ動かさない。

「約束しよう。絶対にあんたたちを売るような真似はしない」

「初対面の人間同士の口約束ほど、もろくて崩れやすいものはない。さながら、砂上の楼閣のようだ」

「ならば、あんたが信じたくなるような証拠を見せよう」

レオは上着の内ポケットから、2つの指輪を取り出した。

毒々しいまでの赤と青の光を放つ宝石。

リングには古代文字と思わしき象形文字が刻まれていた。

「このペアの指輪には呪いがかけられている。青の指輪の持ち主がある呪いの言葉を唱えるだけで、赤の指輪の持ち主をいつでも殺すことができる」

「それを君がつけるといえるのかね？」

「そつだ。あんたに俺の命を預けよう……」

レオがそう言うと、頭は腕組みをした。

「その指輪の効果が本物であることをどうやって証明する」

「信用できないというのなら実際にこの場で試してみるといい。俺が生きるも死ぬもあんた次第だ」

レオは指輪をそつと薬指にはめ、赤の指輪を頭に向けて放り投げた。

「あんたが赤の指輪をつけて、『セムダ・エトウーサ』と一言唱えるだけで、その瞬間に俺は死ぬ」

「実験で君が死んでしまつては意味がないではないか」

「そうだ。だから、あんたは俺を信じるしかない」

頭は高らかに笑った。

第一印象とは全く違う、豪快な笑い方だった。

「君はとてつもないバカか、そうでないとしたら、よほど腹黒いペテン師だな。どちらにせよ、大した度胸の持ち主だ。気にいった。いいだろう。君の男気に免じて許す。マルコをどこへでも連れていくがいい」

回りの子分が不服そうに眺める中、レオと頭は二人で高らかに笑い続けた。

## 第21話 瞳に映る炎

12月28日 深夜 アリシア

「あの指輪は本物だったの？」

炎の中に薪をくべながら、僕はレオに訊ねた。

暗闇の中、お互いの顔をはっきりとは確かめることができない。

予定外の寄り道をしたせいで、僕たちは野宿をするはめになってしまったのだ。

こうして、時折、声の掛け合いをすることで、僕、レオ、マルコの3人がそれぞれ場を離れていないことが辛うじて分かる。

洞窟の外からは夜風の音が鳴る。

外で一夜を過ごしたら、凍死する可能性もあったところだ。

夜道を歩いてきたところ、運よく洞窟を発見し、今、こうして暖をとっているのだ。

マルコによると、この森にはこういった洞窟がいくつもあり、作戦によっては盗賊が拠点として利用することもあるらしい。

勝手に使っているのかとマルコに聞くと「分からない」とあいまいな返事だったが、凍えるような寒さの中、四の五の言っているらしい。

いので、勝手に使わさせてもらっていた。

「指輪の効果が本物かかってことか？それは俺にも分からないな」

「分からないって……」

「うちの親父は、魔法効果のかかった武器や小道具なんかを作る専門の鍛冶屋なんだ。珍しいものも作るから、鉱山が閉まった今もお客の足は絶たない。親父の仕事場に行けば実験中の魔法道具がたくさんあるぜ。この指輪もその一つだ。工房に放置されていたんだが、完成品なのかあるいは失敗作なのかどちらなのかは分からない」

「だったら、本当に死ぬかもしれないんじゃないか！」

「死ぬかもしれないな。だが、時には気まぐれな人助けで、命を賭してみたくなるのが男のロマンってやつさ。女には分からない世界だよ」

「僕は男だ！」と、うっかり喉まで出かかったがなんとか踏みとどまった。

剣客の家に育ってきただけに、僕はこれまで命知らずの人間を何人も見てきた。

そして、そういった人間の多くは、案の定、早死にするものだった。

女を守るため、男のプライドを守るためだなんていう、マツチヨイズムな美学を彼らはよく振りかざしたものだ。

僕も、かつては彼らにいくらか感化されていたようなところがあったので、大会に敗北した時、死をもって償えと言われてもそれを素直に受け入れることができたのだ。

だが、今はそれがどれだけ自分勝手な思い上がりなのか僕には分かる。

レオが死んだら、おじさんもおばさんも酷く悲しむことだろう。

そしたら、僕も悲しくなってしまう。

「勝手なこと言わないでよ……」

「泣いているのか？」

「泣いてないよ」

僕が寒さで鼻をすすったので、泣いているのと間違われたようだ。

「お熱いケンカをしているところを悪いけど、おいらがいることもお忘れなく」

マルコが冷やかすように口をはさんだ。

「べ、別に僕たちはそついう関係じゃ……」

「どうだろうかな。おいらにゃ、いちゃいちゃしているようにしか見えないけどな」

どこかで聞いたような童謡をアレンジした鼻歌を歌いながら面白がっていた。

これ以上、指輪の話が続けても冷やかされるだけだと思ったので、僕はそのまま寝袋に包まれ、そのまま目を瞑った。



## 第22話 男同士の内緒話

12月29日 昼 レオナルド

コルコトに着いたのはお昼すぎのことだった。

本来、昨日の夕方頃には到着し、宿をとるはずだった街だ。

遅れを取り戻すために、さっさと簡単に旅に必要な買い物だけ済ませて先を急ぐつもりだった。

それなのに、アリシアのやつはあくせくとあちこちを歩きまわり何かを探している様子だった。

何を欲しているのか、俺が見つけてやろうかと聞いてみたが、自分で買うとはぐらかされるばかりなので、尾行が得意だと自負しているマルコに探りを入れさせることにした。

しばらくして、マルコが戻ってきたので、問うてみると「あんたは別に知らなくてもいいことだ。追求するのはやめてやりなよ」と、つれない返事。

そう言われてみるとますます知りたくなるのが人情だ。

ひよっとしたら、あいつが隠そうとしている過去と関係あるのかも  
しれない。

今夜の宿泊先あたりで詳しく突っ込んで聞いてみようかな。

しばらくすると、アリシアが戻ってきたのであわてて馬車の手配をして街を発った。

なるべく、お金のかからない徒歩の旅をするつもりだったが、目的地への距離と1週間という目安期間を考えると仕方ない。

同日 夜 アリシア

町外れの民宿に着くと、当たり前のように僕とレオたちとは別の部屋に案内された。

一緒の部屋がいいとさんざん主張したのだけれど、年頃の男と女を同じ部屋にすると、間違いがあつてはいけないからと、宿の女将さんが何度もとがめるものだから、僕も諦めてしぶしぶ一人部屋に行くことにしたのだった。

第一、僕は男だし、レオは真面目だし、万一にもそんなことはないと思うんだけどな。

旅の道中に部屋に一人ぼつんと残されるのは、のんびりまったりとくつろげる安心感もあったが、旅と言うからには道連れ仲間と雑談やトランプ遊びをしてわいわいやるのが醍醐味だろうという気持ちもあつた。

静かな部屋に取り残されて寂しくなったので、レオとマルコが居る部屋に遊びに行ったのだけれども「今は男同士の話をしているから女は入ってくるな」と、拒絶されてしまった。

男同士の話で女を輪に入れたくないものだなんで、だいたいが猥談の類の聞いたら聞いたで気分がよくないものが多いのだが、それで

も以前ならば当たり前のように入れたであろう会話に入れないということは、それはそれで寂しいものだった。

僕は今でもずっと気持ちでは男のつもりなんだけど、やっぱり、2人から見たら女の子なのか……。

カバンから、ナプキンを取り出した。

今日のお昼に雑貨屋さんに旅に必要なものを訊いたところ、婦人用品も必要だと言われたので、街をさんざん練り歩いて買ったものだった。

普通の女性であれば買いたれているので、この手の売り場をさっさと見つけるのだろうが、今までこういうったものに興味を持ったことのなかった僕は頓珍漢なところをうるつきまわっていたのだ。

僕は薬で女の体になった身だが、その薬の正確な効用は知らない。

擬似的に女に見える体になっただけなのか、あるいは今後、これを使う必要があるような体になってしまったのか。

いずれにせよ、備えあれば憂いなしということと旅のお供に持っていくことにしたのだ。

今後の人生で何かの間違ひがあれば、出産することになるのかも  
れないのか……。

ゾツとするような想像ではあつたが、最悪の事態が起きればそう  
りうるということも今のうちに可能性として考えて、自分の体を大  
事にしないといけないな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2918y/>

---

女の子になった少年剣士

2012年1月9日05時46分発行